

平成24年度採択プログラム 事後評価調査

博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表。ただし、項目13については非公表]

機関名	東京工業大学	整理番号	G01
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) ます かずや 氏名・職名 益 一哉 (東京工業大学学長) (平成30年4月1日交替)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) さとう いさお 氏名・職名 佐藤 勲 (東京工業大学総括理事・副学長、理事・副学長(企画担当)) (平成30年4月1日交替)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) なかむら さとし 氏名・職名 中村 聡 (東京工業大学グローバルリーダー教育院院長) (平成30年4月1日交替)		
4. 類型	G <オールラウンド型>		
5.	プログラム名称	グローバルリーダー教育院	
	英語名称	Academy for Global Leadership	
	副題		
6. 授与する博士 学位分野・名称	博士(理学)、博士(工学)、博士(学術)、博士(技術経営)・グローバルリーダー教育課程		
7. 主要分科	(①) (②) (③) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入 総合領域全分科、複合新領域全分科、人文学全分科、社会科学全分科、数物系科学全分科、化学全分科、工学全分科、生物学全分科		
8. 主要細目	(①) (②) (③) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入 上記の主要分科に該当する全細目		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	【平成28年度から】 理学院: 数学系、物理学系、化学系 工学院: 機械系、システム制御系、電気電子系 物質理工学院: 応用化学系 情報理工学院: 数理・計算科学系、情報工学系 生命理工学院: 生命理工学系 環境・社会理工学院: 融合理工学系、社会・人間科学系、イノベーション科学系、建築学系、技術経営専門職学位課程 【平成27年度まで】 大学院理工学研究科: 数学専攻、基礎物理学専攻、地球惑星科学専攻、機械物理学専攻、機械制御システム専攻、機械宇宙システム専攻 大学院生命理工学研究科: 分子生命科学専攻、生物プロセス専攻 大学院総合理工学研究科: 創造エネルギー専攻、物理電子システム創造専攻、知能システム科学専攻 大学院情報理工学研究科: 数理・計算科学専攻、情報環境学専攻 大学院イノベーションマネジメント研究科: 技術経営専攻、イノベーション専攻		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名			
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名			
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)	【平成28年度まで】一橋大学大学院国際企業戦略研究科 【平成29年度】一橋大学大学院国際企業戦略研究科、大学院法学研究科 【平成30年度】一橋大学大学院経営管理研究科、大学院法学研究科		

14. プログラム担当者の構成 計 50 名					
外国人の人数	3 人	[6.0 %]	女性の人数	4 人	[8.0 %]
プログラム実施大学に属する者の割合 [64.0 %]					
プログラム実施大学に属する者			32 人	プログラム実施大学以外に属する者	
そのうち、他大学等を経験したことのある者			24 人	そのうち、大学等以外に属する者	
15. プログラム担当者					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
(プログラム責任者) 佐藤 勲 (H30.4.1 交替)	サトウ イサオ		総括理事・副学長、理事・副学長 (企画担当)	熱工学 工学博士	グローバルリーダー教育課程の総括
(プログラムコーディネーター) 中村 聡 (H30.4.1 交替)	ナカムラ サトシ		生命理工学院 生命理工学系・教授	蛋白質工学・ 分子生物学 工学博士	グローバルリーダー教育課程の運営・管理、グローバルリーダー教育院院長
山田 圭介	ヤマタ ケイスケ		グローバルリーダー教育院・特任教授	会社形成、 市場形成 修士 (工学)	グローバルリーダー教育院 人文社会系道場・道場主
松木 伸男	マツキ ノブオ		グローバルリーダー教育院・特任教授	企業経営、 企業投資 修士	グローバルリーダー教育院 人文社会系道場・道場主
齋藤 義夫	サイトウ ヨシオ		グローバルリーダー教育院・特任教授	生産工学・ 生産システム 工学博士	グローバルリーダー教育院 科学技術系道場・道場主
八橋 雄一	ヤツハシ ユウイチ		グローバルリーダー教育院・特任教授	企業経営・ 事業投資 学士	グローバルリーダー教育院 人文社会系道場・副道場主
橘高 康朗	キツカガ ミチアキ		グローバルリーダー教育院・特任准教授	業務改革 学士	グローバルリーダー教育院 人文社会系道場・師範代
柳田 英二	ヤナギタ エイジ		理学院 数学系・教授	解析学 工学博士	分野を横断した俯瞰力養成

15. プログラム担当者一覧(続き)					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成30年度における役割)
久世 正弘	クセ マサヒロ		理学院 物理学系・教授	素粒子実験物理学博士	分野を横断した俯瞰力養成
山村 雅幸	ヤマムラ マサユキ		情報理工学院 情報工学系・教授	システム生命工学博士	分野を横断した俯瞰力養成
岡村 哲至	オカムラ テツジ		工学院 機械系・教授	伝熱工学・極低温工学博士	分野を横断した俯瞰力養成
笹島 和幸	ササジマ カズユキ		工学院 システム制御系・教授	計測情報学・精密工学博士	分野を横断した俯瞰力養成
天谷 賢治	アマヤ ケンジ		工学院 システム制御系・教授	逆問題博士(工学)	分野を横断した俯瞰力養成
西畑 伸也	ニシハタ シンヤ		情報理工学院 数理・計算科学系・教授	偏微分方程式論 Ph. D.	分野を横断した俯瞰力養成
齋藤 晋	サイノウ スム		理学院 物理学系・教授	物性理論工学博士	分野を横断した俯瞰力養成
重藤 さわ子	シゲトウ サワコ		事業構想大学院大学 准教授	農業経済 Ph. D.	分野を横断した俯瞰力養成
三好 直人 (H30.4.1 交替)	ミヨシ ナオト		情報理工学院 数理・計算科学系・教授	応用確率論博士(工学)	分野を横断した俯瞰力養成
石谷 治 (H30.4.1 交替)	イシヤ ヒサム		理学院 化学系・教授	人工光合成、光化学工学博士	分野を横断した俯瞰力養成
岩附 信行	イワツキ ノブユキ		工学院 機械系・学院長(兼)教授	機械力学・ロボット工学博士	産官学連携キャリアパス構築
三原 久和	ミハラ ヒサカズ		生命理工学院 生命理工学系・学院長(兼)教授	生命化学理学博士	産官学連携キャリアパス構築

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ		所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
藤村 修三	フジムラ シュウゾウ		環境・社会理工学院 イノベーション科学系・教授	イノベー ション論 博士(工学)	産官学連携キャリアパス構築
辻本 将晴	ツジモト マサル		環境・社会理工学院 イノベーション科学系・准教授	経営戦略論・ 経営組織論 博士(政策・ メディア)	産官学連携キャリアパス構築
古田 健二	フルタ ケンジ		グローバルリーダー教育院・特任教授	テクノロジー マネジメント 修士	産官学連携キャリアパス構築
弓山 達也	ユミヤマ タツヤ		環境・社会理工学院 社会・人間科学系・教授	宗教学 博士(文学)	産官学連携キャリアパス構築
Cross Jeffrey Scott	クロス ジェフリー スコット		環境・社会理工学院 融合理工学系・教授	地域新エネルギー モジュール開発 (日米)、 生物工学 Ph. D.	グローバルな視野・能力養成
湯浅 英哉	ユアサ ヒデアキ		生命理工学院 生命理工学系・教授	生物有機化学 理学博士	グローバルな視野・能力養成
梶川 浩太郎	カヅカ ヒロタロウ		工学院 電気電子系・教授	光機能性材料 博士(工学)	グローバルな視野・能力養成
比嘉 邦彦	ヒガ ナリヒコ		環境・社会理工学院 イノベーション科学系・教授	経営情報 システム Ph. D.	グローバルな視野・能力養成
齋藤 滋規	サイノウ シゲキ		環境・社会理工学院 融合理工学系・教授	機械力学・ 微細作業工学 博士(工学)	グローバルな視野・能力養成
坂本 啓	サカモト ヒロキ		工学院 機械系・准教授	宇宙構造物 工学 Ph. D.	グローバルな視野・能力養成
広瀬 晴子	ヒロセ ハルコ		グローバルリーダー教育院・特任教授	国際関係 修士 Degree of Engineer	グローバルな視野・能力養成
和田 雄二	ワタ ユウジ		物質理工学院 応用化学系・学院長(兼)教授	応用化学、 工業物理化学 工学博士	グローバルな視野・能力養成
安田 幸一 (H29.4.1 交替)	ヤスタク コウイチ		環境・社会理工学院 建築学系・教授	建築学 (建築意匠・ 建築設計) 博士(学術)	グローバルな視野・能力養成

15. プログラム担当者一覧(続き)					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成30年度における役割)
布井 千博	ヌイ チロ		一橋大学 大学院法学研究科・ビジネスロー専攻・教授	商法・会社法 修士	グローバルな視野・能力養成
井上 由里子	イノウエ ユリコ		一橋大学 大学院法学研究科・ビジネスロー専攻・教授	知的財産法 学士	分野を横断した俯瞰力養成
中窪 裕也	ナカクボ ヒロヤ		一橋大学 大学院法学研究科・ビジネスロー専攻・教授	労働法 修士	分野を横断した俯瞰力養成
小川 宏幸	オガワ ヒロユキ		一橋大学 大学院法学研究科・ビジネスロー専攻・教授	商法・金融法 法学博士	分野を横断した俯瞰力養成
吉村 政穂	ヨシムラ マサホ		一橋大学 大学院法学研究科・ビジネスロー専攻・教授	租税法 学士	分野を横断した俯瞰力養成
三隅 隆司 (H29.4.1 追加)	ミすみ タカシ		一橋大学 大学院経営管理研究科・経営管理専攻・教授、 学長補佐	金融論 商学修士	分野を横断した俯瞰力養成
森村 進 (H29.4.1 追加)	モリムラ スム		一橋大学 大学院法学研究科・法学・国際関係専攻・教授	法哲学 博士(法学)	分野を横断した俯瞰力養成
青野 利彦 (H29.4.1 追加)	アオノ トシヒコ		一橋大学 大学院法学研究科・法学・国際関係専攻・准教授	冷戦史、 アメリカ外交史 Ph. D. (歴史学)	分野を横断した俯瞰力養成
只野 雅人 (H30.4.1 交替)	タダノ マサヒト		一橋大学 大学院法学研究科・研究科長	憲法 法学博士	分野を横断した俯瞰力養成

15. プログラム担当者一覧(続き)					
氏名	フリガナ		所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
千本 潤介 (H29.4.1 交替)	チホノ ジュンスケ		一橋大学 大学院法学研究科・ビジネスロー専攻・准教授	知的財産法 修士(情報 理工学)、 法務博士 (専門職)	産官学連携キャリアパス構築
穴戸 善一	アナト センイチ		一橋大学 大学院法学研究科・ビジネスロー専攻・教授	商法・会社法 法学博士	グローバルな視野・能力養成
射手矢 好雄	イヤマ ヨシオ		一橋大学 大学院法学研究科・法学・国際関係専攻・特任 教授	ビジネス・ロー 修士	グローバルな視野・能力養成
Vicki Beyer (H30.4.1 交替)	ビッキー バイヤー		一橋大学 大学院法学研究科・ビジネスロー専攻・教授	ビジネス・ロー 法学博士	グローバルな視野・能力養成
K. J. Ray Liu	ケイ ジェイ レイ リウ		メリーランド大学・教授	情報工学 Ph. D.	グローバルな視野・能力養成
豊田 光世	トヨタ ミツヨ		新潟大学研究推進機構 朱鷺・自然再生学研究 センター・准教授 (H27.9.1 所属変更)	環境哲学、 合意形成 博士(学術)	分野を横断した俯瞰力養成
大澤 弘治	オサワ ヒロシ		Global Catalyst Partners・General Partner	ベンチャー企業向 投資・ 育成業務 博士(工学)	産官学連携キャリアパス構築
馳 雅樹	ハセ マサキ		株式会社青山パートナーズコンサルティング・ 代表取締役、代表パートナー、公認会計士、税 理士	経営・ 会計・税務 学士	産官学連携キャリアパス構築

16. プログラムの応募学生数、合格者数及び履修生数

本プログラムの過去のリーディングプログラム応募学生数等について記入してください。

(各年度3月31日現在(ただし平成30年度は提出日現在))

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度 * (今後の募集予定: 有 無)	
プログラム募集定員数	10	15	15	15	15	15		
① 応募 学生 数	15	23	27	21	17	9		
	うち留学生数	0	5	8	6	3	1	
	うち自大学出身者数	3 (0)	12 (1)	11 (1)	9 (2)	5 (1)	7 (0)	()
	うち他大学出身者数	12 (0)	11 (4)	16 (7)	12 (4)	12 (2)	2 (1)	()
	うち社会人学生数	0 (0)	2 (2)	7 (4)	3 (2)	1 (1)	0 (0)	()
うち女性数	4 (0)	2 (2)	9 (4)	4 (1)	3 (1)	2 (0)	()	
② 合格 者数	9	12	14	12	12	7		
	うち留学生数	0	1	5	1	2	0	
	うち自大学出身者数	2 (0)	8 (0)	4 (0)	6 (0)	4 (1)	6 (0)	()
	うち他大学出身者数	7 (0)	4 (1)	10 (5)	6 (1)	8 (1)	1 (0)	()
	うち社会人学生数	0 (0)	1 (1)	7 (4)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	()
うち女性数	2 (0)	0 (0)	8 (4)	2 (0)	2 (0)	2 (0)	()	
③ ②の うち 履修 生数	9	12	14	12	12	7		
	うち留学生数	0	1	5	1	2	0	
	うち自大学出身者数	2 (0)	8 (0)	4 (0)	6 (0)	4 (1)	6 (0)	()
	うち他大学出身者数	7 (0)	4 (1)	10 (5)	6 (1)	8 (1)	1 (0)	()
	うち社会人学生数	0 (0)	1 (1)	7 (4)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	()
うち女性数	2 (0)	0 (0)	8 (4)	2 (0)	2 (0)	2 (0)	()	
プログラム合格倍率 (応募学生数/合格者数) (小数点第三位を四捨五入)	1.67倍	1.92倍	1.93倍	1.75倍	1.42倍	1.29倍	0.00倍	
充足率 (合格者数/募集定員)	90%	80%	93%	80%	80%	47%	0%	

※留学生については、「うち留学生数」にカウントするとともに、うち自大学出身者数、うち他大学出身者数、うち社会人学生数、うち女性数の()に内数を記入してください。

※平成30年度*(今後の募集予定:有・無)については、平成30年度内に履修を開始する学生を募集予定の場合(秋入学等)は「有」に、募集予定がない場合は「無」に印を付けてください。

また、「有」の場合は、当該予定分については表中には含めず、備考欄へ募集時期及び募集予定人数を記入してください。

※編入学生がいる場合は、年度ごとの内訳を備考欄に記入してください。

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

本学位プログラムの概要と特色

高度な科学技術に立脚した現代社会の課題を適切かつ適時に解決するためには、科学技術に関する卓越した知識を有しグローバル社会を牽引する能力を持つ人材（グローバルリーダー）の存在が必須であるが、これまでの我が国の大学院はこうした人材の養成を必ずしも重視してこなかった。この反省に鑑み東京工業大学は、平成23年4月に、「グローバルリーダー教育課程」を編成し、それを実施する「グローバルリーダー教育院」を設置して、限定された規模ではあるが教育を開始している。

本教育課程は、グローバルリーダーに求められる能力を、(1) 博士人材として専門領域の世界的コミュニティに敬意を持って受け入れられるに足る深い知識と独創性、(2) 自身の専門以外の学術を、学問領域の枠を越えて普遍化しシームレスに理解できる俯瞰力、(3) 国・地域や文化の違いを越えて他者の意見を理解し、かつ自身の意見を合理的に説明して合意形成ができるコミュニケーション力、(4) 合意の結果を形にし、社会に貢献することができる行動力と創造性、の4つと定義して、それらを効果的に育む修士・博士一貫型の教育システムを全学体制で構築している点を最大の特色としている。

(1)の高度な専門能力の養成には、本学の強みである卓越した専門領域の教育体系を、既存の研究科・専攻の協力を得て組み入れる。これに加えて、(2)～(4)の「人間力」の養成を(1)の専門能力養成と両立させるため、「道場」と称する修練の場を複数設け、「道場主」のファシリテートの下、様々な国籍・文化的背景・専門性を有する学生同士が、それぞれの知識や能力をぶつけ合いながら、実務的なグループワークやプロジェクトの遂行を通じて切磋琢磨する環境を提供する。専門領域の異なる他の学生や、知己を得た国際社会のリーダーの考え方を咀嚼・普遍化することで、将来、いかなる分野の課題に直面しても臆することなくそれに取り組める意識と能力を身につけさせる仕組みである。その際、切磋琢磨する学生の専門性やグループワーク・プロジェクトの対象の幅を拡げるため、一橋大学と組織的に連携して教育課程を構築・運営するとともに、グローバルリーダーを志向し本教育課程履修を志願する一橋大学の学生若干名を道場に参加させる。学生には異なる2道場への所属を義務づけることでより視野の広い人間力を養成するとともに、ある道場の学生が他道場の学生に議論を挑む「道場破り」によって合意形成能力と行動力を強化する。さらに、身につけつつある専門能力や人間力を海外の企業や国際機関等の実社会で試し、何処までが通用し何が不足しているかを学生自身に認識させる機会として、3ヶ月以上の「オフキャンパス実習」を必修とする。

また、修了者の質を保証するため、特色ある修了審査を実施する。すなわち、高度な専門能力の養成状況は、主に学術的観点から研究科・専攻の協力により審査する。これに加えて、本教育課程で身につけた能力・意欲をもとに、社会にどのような貢献をしたいかを学生に発表させ、本学および一橋大学の教員、ならびに産官学から招聘する審査員が納得するまで討議を行う口頭試問（ディフェンス）を修了審査として実施して、上述の4つの能力の修得を確実に保証できる仕組みとしている。

こうした教育を実施するにあたり、適切な素養と強い意欲を持った学生を選抜するため、本教育院への所属時期を修士1年次後学期以降と定め、自身のキャリアプランと修了要件を十分に自覚させた上で、夏季休暇中に行う合宿選抜の合格者のみを履修者とする。また、リーダーを志向する学生に対して本教育院所属前にその基礎素養を育むための「リーダーシップ基礎科目群」を開講している。

さらに、修了者のアウトカム像が社会の求めるものと乖離しないよう、道場教育で国際機関を含む産官界からのプログラム担当者や外部講師による実務的課題を題材としたPBLを実施するとともに、産官学の国際的なメンバーからなるアドバイザリーボードを設け、本教育課程の内容・方法についての助言を求める。また、全学同窓会である蔵前工業会等、産官学界と連携して教育課程を構築・実施するとともに、修了者のキャリアパスを確保する。

本学位プログラムの優位性

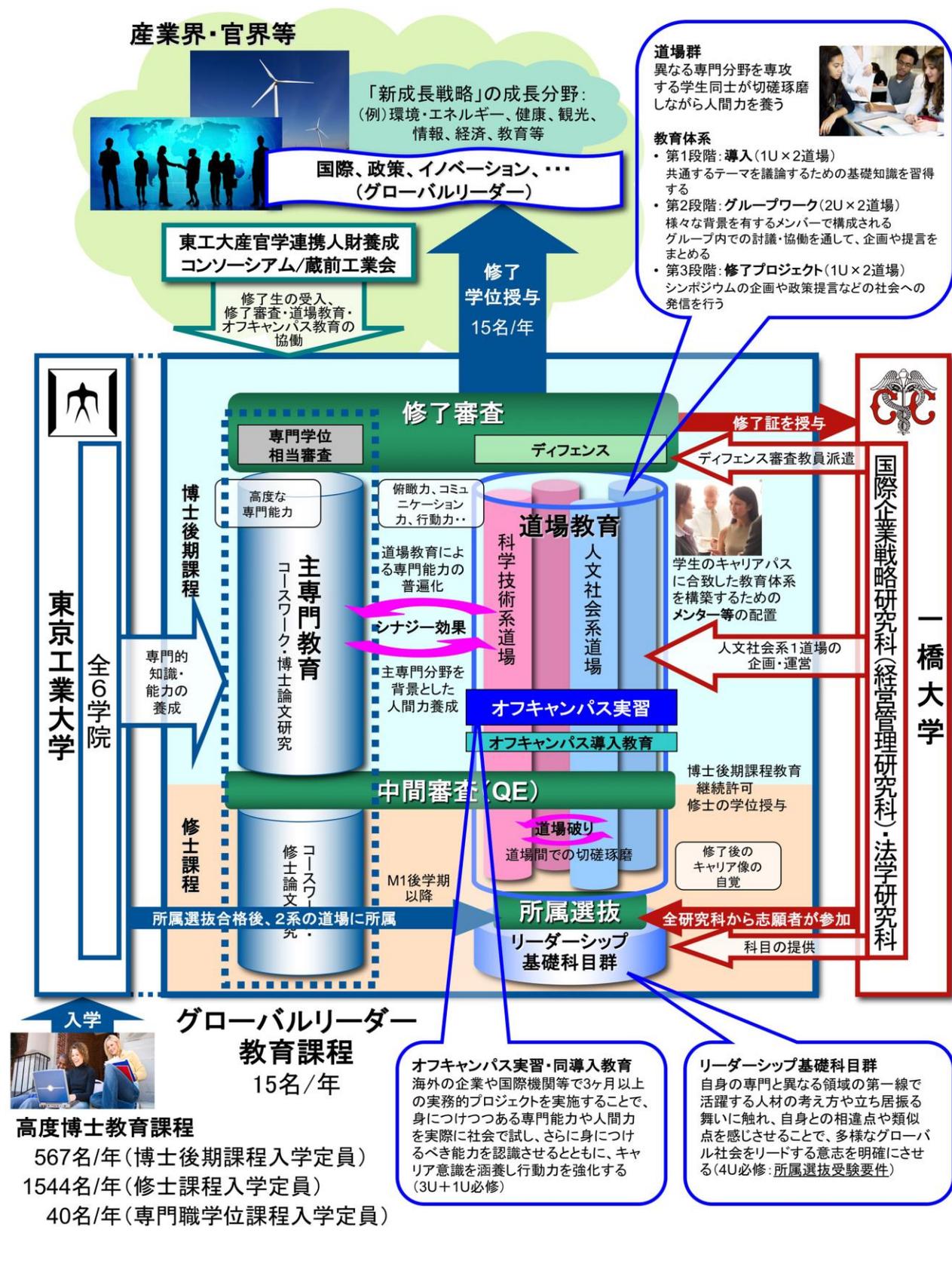
本学は、大学間で103、部局間で115（平成29年5月現在）の海外大学等と学術交流協定を締結し、学生・研究者の国際交流を組織的に支援している。留学生受入にも積極的で、大学院における留学生比率は18.9%に達する。こうした交流実績、高い留学生比率を背景に、道場において留学生を含めた学生同士を切磋琢磨させることによって、言語能力に留まらない真のグローバル的視点を養成できる点に優位性を有する。

また本学は、組織的連携制度、産学連携会員制度を始めとする数多くの仕組みを用意し、国内外の企業等との結びつきを強めてきた。これらは、共同研究等の研究面に留まらず、人材養成面へも発展しており、各種の産学連携教育コンソーシアムが構築されつつある。この枠組みを利用して、修了生の受け入れのみならず、グローバルリーダーに求められる能力やその養成方法についての意見・要望を聞く体制が構築できる点も本学位プログラムの強みである。

さらに、一橋大学との連携については、平成13年に締結した「四大学連合憲章」の実績を背景としており、継続的な連携体制が維持できる点も本学位プログラムの優位性の一つと言える。

プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)



プログラムの成果

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成するという観点に照らし、学生や修了者の活躍状況を含め、アピールできる成果について記入してください。)

本学位プログラム所属者の学びに対する意識変革と本学の教育体系への波及

本学位プログラムは、博士として敬意を払われるに足る高い専門能力の養成と平行して、自身の専門能力だけでなく他者の能力をも活かして、複雑な社会課題を解決に導くための能力を身につけることを特色とする。このような能力は、個々の学生の個性や志向・キャリアプランなどに応じて、学生自身が学び取っていくものであり、教育組織としてはそれぞれの学生の個性や志向を妨げることがないように注意しつつ、彼ら・彼女らが学ぶ「場」を適切に提供していくことが重要であると認識している。このような概念は、平成26年に開催したAGLシンポジウムにおけるGeorgia Institute of Technology Leadership Education and DevelopmentのWynens博士(当時)からの基調講演「Can Leadership Be Taught? (リーダーシップは教えられるか?)」の内容とも軌を一にするものであり、本学位プログラムの基本理念の一つである。

このような観点から、本学位プログラムに所属する学生には「主体性」と「気概」を強く説き続けている。これと同時に、多様な学生が切磋琢磨する場である道場を主宰する教員(道場主)には、「教えすぎない」ことを徹底してきた。こうした教育体系は従来の大学・大学院教育に慣れ親しんだ学生にとっては馴染みのないものであり、この趣旨を理解するまでにはある程度の時間を要するが、一旦これを理解すると、自身の将来の姿を真摯に考え、それに向けた活動に主体的に取り組むようになる。このような学生の学びに対する意識変革が教育プログラムとしての本学位プログラムの最大の効果であると言える。

こうした意識変革の重要性と効果は本学内でも共有され、次項でも述べるとおり、本学が平成28年度から実施している新しい教育体系にも色濃く反映している。すなわち、学士課程初年度に、国内外の第一線で活躍する講師陣が提示する社会課題に対する気づきをもとに、専攻する分野を超えて学生同士が議論を行う「東工大立志プロジェクト」から始まり、学士課程3年次に今後の自身のビジョンをまとめる「教養卒論」、修士課程1年次の「リーダーシップ道場」を経て、博士後期課程でプロジェクトを遂行する「学生プロデュース科目」に至るまでの一連のカリキュラムからなる教養コア学修が用意されている。この教養コア学修は、博士課程リーディングプログラムの目指す人材養成をより早い段階から効果的に実現しようとするものである。これに加えて、より高度なリーダー人材養成を行うリーダーシップ教育院を部局相当の実体ある継続的な共通教育組織として平成30年4月に設置することで、「学生の主体的学び」を後押しする教育の仕組みを全学体制で構築できたことは強調しておきたい。

本学位プログラム所属者の活躍と修了者の状況

本学位プログラムを通して自身の将来の姿を真摯に考え、それに向けた活動に主体的に取り組んだ所属者ならびに修了者は、学術面だけでなく社会的な活動においても高い評価を得ている。たとえば、本学位プログラム第2期生の高安基大は、仲間とともに立ち上げた企業の提供する搭乗型外骨格動作拡大スーツ「スケルトニクス」が2013年度グッドデザイン賞を受賞している。第1期生の青木祐太は、International Space Apps Challenge Tokyo 2014で第3位入賞、平成27年3月のWebとクルマのアイデアソンで優秀賞を受賞した。同じく第2期生の辻理絵子は、東京大学、早稲田大学、ならびに本学の他のリーディングプログラム所属学生と組んだチームでEDGE Innovation Challenge Competition 2015に臨み、総合優勝を獲得している。さらに、第2期生の大内遥河は、Startup Weekendでの2回の優勝の後、KDDIのラボの支援対象に採択され、自身のアイデアを社会に提供する企業を立ち上げている。最近では、第2回のビジネス構想コンペティションにおいて、第6期生の佐藤拳斗、松浦賢太郎が一橋大学からの参加者である岩本卓也とともにLine(株)賞を、第3回ビジネス構想コンペティションでは、第4期生の井口友莉、下川絃子、橘優太郎、第7期生の土屋泰樹と一橋大学からの第7期生である逢坂仁葵のグループが優秀賞を受賞している。



この他にも自身のアイデアを企業の形で社会の提供し、新たな価値を創造しようとする所属学生や修了者が複数存在する。本学位プログラムからは、平成30年5月現在で12人の修了者が社会で活躍を始めているが、うち1人は自身が起業した企業で活動しており、他に1人が起業に向けて準備をしている。また、修了者のうち7人はいわゆる民間企業でのキャリアを歩んでいるが、こうしたキャリアパスを構築するに際しても、本学位プログラムで身につけた主体性を発揮し、自身が取り組みたい内容と合致する企業等を選択している。その結果、こうした民間企業の上司からの評価でも、真のリーダー人材としての活躍はこれからとしながらも、基本的な能力やAGLを通して得られた経験については前向きなコメントを頂戴している。こうした学生たち・修了者たちこそが本学位プログラムの最大の成果である。

プログラムの成果

(大学院改革につながる教育研究組織の再編等の学内外への波及効果や課題の発見について記入してください。)

全学規模での大学・大学院教育改革への波及

本学では、大学院を含むすべての教育組織と教育体系を抜本的に見直し、平成28年4月から新たな体系のもとでの教育を開始したところである。新教育体系では、学士課程修了者の90%以上が大学院に進学する状況に鑑み、これまでの学部・研究科をすべて改組して、**学部と大学院を統一した「学院」**を設置し、学士課程と修士・博士後期課程の間で不連続がないようカリキュラムを設計するとともに、学院の区分を、理学、工学、物質理工学、情報理工学、生命理工学、環境・社会理工学といった大括りな学術分野に基づくものとして、学生が学びたいと考える分野の学術を自由に選べるように配慮している。さらに、学士課程入学時から博士後期課程修了に至るまでの期間を通して**リベラルアーツ教育を必修**とし、学院で学ぶ学術を適切に社会課題の解決に適用するための知性と人間力を身に付けることとしている。学事歴の観点では、**クォーター制を導入**することで、集中的な学びを通じた学修効果の向上と、留学やインターンシップなどへの柔軟な対応を可能にしている。こうした教育改革の最大の狙いは、「卓越した専門性に加えてリーダーシップを備えた理工系人材を育成し、よりよい世界を創る」という理念に基づき、学生の主体的な学びを後押しすることにある。

こうした教育改革の理念や新しい教育体系の方法論には、本学位プログラムをはじめとする本学で実施されてきた博士課程教育リーディングプログラムの実績と経験が活かされている。例えば、新しい教育体系においては、教員は学院に所属し、系・コースの教育を「担当」すること、学生定員も学院ごとに管理され、系・コースといった分野ごとの教育課程の学生数は、学生の希望や社会の要請に基づいて柔軟に変更されることとなっている。すなわち、本学の新しい教育体系における系・コースは既に、すべてが「**学位プログラム**」制に移行していると言える。また、**リーダーシップ養成**について言えば、新教育体系の教養コア学修をあげることができる。教養コア学修では、学士課程初年度に国内外の第一線で活躍する講師陣が提示する社会課題に対する気づきをもとに専攻する分野を超えて学生同士が議論を行う「東工大立志プロジェクト」から始まり、学士課程3年次に今後の自身のビジョンをまとめる「教養卒論」、修士課程1年次の「リーダーシップ道場」を経て、博士後期課程でプロジェクトを遂行する「学生プロデュース科目」に至るまでの一連のカリキュラムが用意されている (https://educ.titech.ac.jp/ila/education/core_liberal_arts_education.html)。このカリキュラムの基本概念は、「博士課程リーディングプログラムの目指すところをより高い水準で実現するためには、リーダーシップの基礎素養の養成を学士課程から開始することが効果的」との判断に基づくものである。

リーディングプログラム後継教育組織への波及

この新教育体系の教育効果を背景として、特に優秀な大学院学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、博士課程教育リーディングプログラムで実施してきた教育体系を受け継ぐ修士課程・博士後期課程学生向けの学位プログラムの実施組織、すなわち「**リーダーシップ教育院**」を、**専任教員・特任教員を配置する全学の共通教育組織**として平成30年4月に設置した (<https://www.total.titech.ac.jp>)。リーダーシップ教育院は、選抜された大学院学生を対象に、社会課題の認知とリーダーシップ、合意形成力、コミュニケーション力に加えて、幅広い教養を身に付けるためのカリキュラムを提供し、これと学院・コースが提供する専門分野の教育とを組み合わせることで、さまざまな分野でグローバルに活躍するリーダー人材を養成しようとするものである。また、この構想に際しては、他大学の大学院生にも門戸を開放して切磋琢磨する学生の専攻分野や志向の幅を広げることとしている。言い換えると、リーダーシップ教育院は、本学位プログラムの教育体系を下敷きに、博士課程教育リーディングプログラムの理念を受け継ぎ、産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー人材を継続的に養成するための組織を具現化したものである。

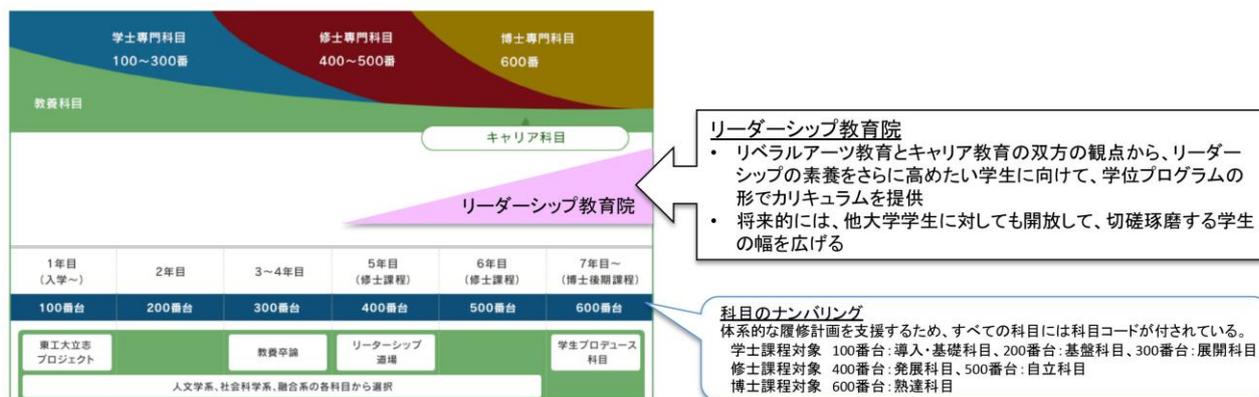


図 「リーダーシップ教育院」の位置づけ